The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	洛星と私
Author(s)	山本, 聖人
Citation	臨床哲学のメチエ. 2017, 22, p. 66-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68184
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

洛星と私

山本 聖人

はじめに　謝辞と自己紹介

まず何よりも、洛星高校プロジェクトの特集、その寄稿というお話をいただいたことを、メチエ編集に携わって下さっている院生・学生さんに感謝申し上げたいと思います。私は、大阪大学文学部、倫理学研究室を卒業してから、臨床哲学に籍を置きつつ国語の中高教員として３年間勤め、この３月に臨床哲学研究室を卒業しました。４月からは滋賀県に場所を移し、同じく国語科の高校教諭として勤めています。自分の研究に区切りをつけ、教員として再出発の気持ちを新たにしたこの時期に、大学で自分が教育の道に進むきっかけのひとつとなった洛星高校についての寄稿のお話をいただいたことも、不思議な巡り合わせがあるような気がします。洛星と研究室への感謝の気持ちと、現在の自らの教室でのあり方を省みるという意味を込めて、この稿では、私が洛星に関わったことで何を知り、考え、それが今の教員としての私にどのように関わっているか、ということを中心に書きたいと思います。

2011 年度　戸惑いと対話

私が初めて洛星高校の授業に加わったのは、大学２回生の時でした。その年度は洛星に関わっている人員が多かったので、スケジュール管理や研究室への告知といった仕事を役割分担していました。私は右も左もわからなかったので、授業映像の記録係という役割をいただき、カメラを片手に授業を半ば傍観するところから始まりました。初めて授業に加わった感想を一言で言えば、「意味不明」。子どもたちと共に輪になって何かを話している。話しているのだけど、なぜその話をし

ているのかわからない。「どうしてこの授業をとったの？」「哲学ってどんなイメージ？」そんな話をしていたと思う。それだけの話を１時間も話しながら、ぼんやりとまとまらないまま授業終了の鐘が鳴る。感想のひとつには、「哲学って結局なんなんだろう？」と素直な疑問が綴られていました。私はその授業を見て、あまりに自分がイメージしていた授業と異なるその有りように、一種の拒絶反応を示したのだと思います。この一時間で、彼らは何を得たのか。自分は何を得たのか。それが全くといっていいほど定まらず、その後の振り返りでもはっきりとした答えが見つけられないまま、その日は終わりました。

堂々巡りを続ける問いと答えの応酬に、「こんなこと、何のためにするのですか？」と尋ねてくる生徒。哲学科に興味を持ち、学部生の私に大学の授業や学校生活の様子を熱心に尋ねてくる生徒。生徒、生徒。授業者として子どもたちに相対する限り、授業を受ける子どもたちとの間には授業者–生徒、という暗黙の権威関係が生じており、それを洛星の子どもたちは授業者への「信頼」や「疑問」という形で表していたのだ、と気づいたのは、大学院に進学してからでした。そして私は、洛星に参加したばかりのころ、そのように子どもたちから無条件に伝わってくる期待や権威関係にただ戸惑うばかりで、それに伴う教授者、もっと言えば「先生」としての自らの責任にあまりに無自覚であったのです。もちろん、個々の授業での具体的な気づきは多くありました。印象に残っているのは、紙パックのジュースを持って行き、「これは古いか、新しいか？」と問いかけるところから始まる、概念によって事物を振り分けるワーク。個々人によって古い、新しいという概念の用い方、具体物への適用の仕方が全く異なり、自らの言葉の使い方が絶対ではないということを強く思い知らされたことを覚えています。ただ、このような気づきはあくまで対話の参加者としてそこに関わっていたから生まれたものであり、授業を提供する側として自らを捉えた時に、授業自体に対する姿勢としては先に述べた「戸惑い」の枠組みから、大きくは外れなかったように思います。

私は洛星に関わった４年間のうち、この１年目のプロジェクトに最

も多く参加しました。関わっていた院生・学部生が多かったので、ほぼ毎週ミーティングが開かれ、授業内容だけでなく個々の学校観、思い出、教育全般についての議論など、多岐にわたる話ができました。授業やその目的について、実感として理解しきれない部分が多かったものの、そこでの議論や対話は、私の既存の教育観を大きく刺激し、時に私を困惑させ、変容を求めてくる程の重みがありました。1 年目が終わった時に曲がりなりにも理解できたのは、この「哲学の授業」には目的があり、その達成のために全力を尽くすことが授業者としての責任であるということ、その目的は「プラグマティズムを理解する」「正義論について考える」といった、特定の事象についての教授、つまり「何を教えるか」という枠組みから導かれるものではなく、その場の子どもたちの言葉ややり取りから「何について、どのように考えるか」を「子どもたちと共に」即興で設定し、そこで生まれた問いとその探究をいかに丁寧に、しかも全員で行うという姿勢を身につけさせるか、という一種のカリキュラム計画の根幹に位置づけられているものだ、ということです。そのために、毎回の授業は子どもたちが好きに発言し、自由な問いと答え、テーマとテーマが入り乱れている、一見すると無秩序なやり取りが多くを占めます。今にして思えば、そのような表面上の現れしか捉えられず、自分が受けてきた伝統的な教授形式の授業との差違に対応することができなかったからこそ、私は初めての授業を「意味不明」と捉えたのでしょう。これに似た感覚は、洛星に初めて参加される方の多くが抱かれるようです。一種の洗礼のようなものかもしれません(笑)。このような気づきは、次年度の私の参加の仕方に大きく影響してきます。しかし、この時点ではあくまで頭で洛星の授業について理解した、というだけに過ぎませんでした。私自身が対話という考え方や、参加の仕方に馴染んでいなかったため、次年度に担当した進行役では、全くその働きを果たせなかったのです。

2012 年度　醜態と権威

2 年目は、単なる記録者や対話の参加者としてではなく、小グループに分かれての対話の進行役を担うようになりました。洛星で授業をすることの難しさと、授業者としての無力さを痛感したのがこの年でした。例えば進行役として気を配り、何でも発言しやすいような雰囲気を作ったり、対話の内容を受けて全員に問いを投げ返したり、といった実際の場面での振る舞い方が、今よりも遙かに未熟であったのです。

ある日の研究室でのミーティングで、このような問題提起がなされました。「今年の生徒たちは、自分の意見を相手にわかってもらおうと一生懸命話をする。しかしそれだけでなく、誰かと共に問題を探求していこうという姿勢を育むことが重要なのではないか」。確かに途中で話を遮ったり、自分の意見と違う意見を論破するために質問したりする生徒が多かったため、その指摘はとても納得のいくものでありました。違う意見を排除するのではなく、どうしてその意見が出てきたのか、その人は何を大切に思っているのかを知るために質問することを知って欲しい。このような思いを持って、その次の授業では相互質問法という対話ゲームを生徒たちに提案し、行いました。

授業の日、私は醜態を晒しました。「相手の意見を知るために質問してみよう」などと、高らかに目的を宣言しておきながら、私自身が彼らの意見を掘り下げるための質問が全く思い浮かばなかったのです。当然生徒たちは戸惑い、興味を失い、このワークを続ける意味があるのか？と問うてきます。それに対し、私はとりあえず続けてみよう、目的は最初に伝えているからと繰り返すしかできません。生徒たちには不信感が募ります。一般的な授業と違って、黒板やノートは使いませんから、対話型の授業では目に見える形での達成はありません。そのような事情も相まって、そこに参加してくれていた生徒は、本当に何のためにそこにいるのかわからなかったと思います。まさに前の年に肌で感じた、教室内の権威関係によって、今度はギリギリ話し合いが成立している、という状態でした。参加者全員にとって居心地の悪

かったであろう 1 時間が終了して、私は自分の無理解と経験不足(対話経験の浅さ)を責め、教室を出て行かずに授業終了までそこにいてくれた生徒たちには申し訳なさでいっぱいになりました。私は自身ができないこと、本当は全くわかっていなかったことを、その理念だけを彼らに押しつけ、強制したのです。「相手を知るために質問する」という理想を、授業という現実の中に落とし込み、生徒たちと共に考えていく、そのための理解も、実践経験も、圧倒的に不足しているように思われました。以後の私は、権威にすがらない授業づくり、そのためにまず自身がしっかりと対話に参加し、人の言葉に関わっていくという自分のあり方に重きを置くようになります。このような姿勢は洛星だけでなく、日常生活や臨床哲学の様々な対話的試みの中での自分にも結びついていくものでした。そして、洛星の授業の中で授業者に一番求められるのは、「素直に」「いる」ということではないか、そしてそれは言葉にするより、とても難しいことなのではないか、という自分なりの仮説を立て、この年は終わりました。

2015 年度　権威と反省

学部 4 回生では就活や卒論の関係でほとんど参加できず、その次の年は大学院を休学して教員として働いていましたので、私が次に洛星に参加したのは学部 3 回から 2 年後、大学院に復学した年でした。

この年は、通年を通してあまり参加出来ませんでした。この年のプロジェクトリーダーは教育学に造詣の深い方で、例えば全国で対話教育を実践されている現職の教員を洛星に迎え、ゲスト講師としてその回の授業をお願いするなど、これまでの洛星にはない取り組みをしようとされていました。初回の授業内容は、ゲスト講師を招いて行った、合意形成を目的とした話し合いのワークでした。性別、年齢、職業などの異なる 10 人から、人類の命運を託す 6 人を選ぶとしたら誰を選ぶか、その理由はなにか、グループの中で一致した見解を出してください、というようなお題だったと記憶しています。いわゆる思考実験

的な、考えるのが好きな子どもたちにヒットするよう作られた問題であり、生徒たちは積極的に参加していました。

先に私は、権威にすがらない授業づくりのために、自らが対話に参加していくという姿勢を大切にしていた、と書きました。それは、みんなで共通の問いを考え、深めていくという場への参加の仕方を、まず授業者が実践して見せていくことで、長期的な視点で見たときに子どもたちにもそのような参加の仕方が根付いていく事を期待していたからです。時間がかかっても、全員でその問いを考えるという時間自体が尊い学びの瞬間になっていくと信じていたからです。そのような時間の中で、子どもに見せてきた自分の姿勢として第一に挙げられるのは、私の場合はただひたすら「素直に」「いる」ということでした。面白いことには笑い、納得がいけば頷き、考えている時間は俯いて顔に手を当てる。まず一人の人間として、その場所で起こったことに素直に反応するということ。これが、学部生の時に沢山の失敗を重ねる中で、洛星で授業をするための大前提として、自分が身につけたことでした。

話を合意形成のワークの話に戻します。私はその時のワークで、何とも言えない居心地の悪さを感じたのです。お題があまりに非現実的で、個々の意見の妥当性について検証できなかったということもありますが、何よりも講師の方の授業に対する目的意識と、その授業への自負が非常に強かったという点に、私は引っかかりました。目的意識が強いのは結構なことですが、授業進行の中では生徒の発言を曲解したり、強引に他の意見と結びつけて解説したりという「荒技」が目立ちました。教員が生徒の発言を、授業目的に都合の良いようにつなぎ合わせて結論を導いていく姿は、一見すると筋が通っているように聞こえますし、むしろ一般的な話し合いの授業などでは見慣れた光景かもしれません。しかしそれは結局、子どもたちがひねり出した思考の断片を材料として作り直された、「先生の考え」でしかないわけです。その言葉が出てきた対話の文脈を無視しているという点で、その瞬間の子どもの思考は全くもって無視されているにも関わらず、あたかも

その子が考えたことであるかのように全員の前に提示する。これは子どもの思考を殺すことだと私は思います。しかもその裏には授業者の「俺が意図した通りに考えさせた」「俺がここまで導いてやった」という、教員権威を前提にした傲慢が潜んでいるのです。

授業後のミーティングで、この講師の方は「この授業をしていると、こんな答えを言ってくる生徒もいる」というエピソードを誇らしげに語っておられました。今日、目の前の生徒たちが考えたことからではなく、「自分が考えたこの授業をすれば、生徒は必ずこうなる」という理想の枠組みからしか物事を見られず、自分の物差しのみで子どもの思考活動を理解・評価しようとする意図が透けて見えました。これは対話形式の授業に限らず、学校教育に携わる教員がしばしば陥りがちな落とし穴であると思います。教え込み型の授業に熟達すればするほど、教員が想定した以上の子どもたちの思考に気づけなくなってしまうということでしょうか。自らの短い教員生活と照らし合わせながら、私はこんなことを考えていました。とにかく私はその授業の時、居心地が悪かった。授業者が無自覚に濫用する権威に押され、その居心地の悪さを表に出すこともできなかった。私が大切にしてきた、「素直に」「いる」というその場への関わりが、それ以上できそうにありませんでした。その他、私の不手際や様々な行き違いもあり、その年は数回だけの参加で終わってしまいました。私の洛星との関わりのうち、最も悔いの残る 1 年でした。受講してくれた生徒さんたちに、本当に申し訳ないと思っています。

2016 年度　対話

この年は、もう一人の同期の院生さんとともに毎回の授業計画から進行まで、プロジェクトリーダーとして携わりました。大学院の最終年度として、長く洛星に関わってきた者として、この授業を生徒さんにとって実り多いものにしたい、と意気込んでいたのを覚えています。授業としては p4c 形式の対話を多く取り込みました。身体を動かした

り、演劇を作るなどのワークショップを実施することもありましたが、あまり体験型の授業形式に偏ると、生徒の中でこの授業が単なる「イベントごと」の感覚で終わってしまうという懸念があったからです。私は(そして、多くの臨床哲学研究者もきっと)臨床哲学がこれまで築き上げてきた「対話」は、週に 1 時間、特別講座という枠を設けないとできないようなものではないと考えています。学校であれば、他者の意見に耳を傾け、知ろうとし、その他者の地点と自分の地点を繊細に感じ取りながら共に考え、受容したり、されたりする、という本当に基本的な姿勢を身につけてくれれば、日常会話のレベルから哲学的探究が始まっていくはずで、その意味で洛星の哲学の授業はほんのきっかけに過ぎないと思います。「探究的思考のきっかけづくり」のために、私はどうしても対話の時間を中心に授業を計画したいと考えました。そのために、例えば演劇ワークショップを行う時も、まずテーマから考えたい問いを出し合い、1 時間 p4c 形式で対話をしました。そして、その中で生まれた問いや気づき(私が進行したグループでは、「痛み」をテーマに対話をしたのですが、自分の痛みの経験を基に考える人が多く、逆に人に痛みを与える場面も多くあるのではないか、などと問いが続いていきました)から、いくつかのグループに分かれて劇をつくり、発表し合うという展開をとりました。このように、ワークショップの際はまず対話を通して考えを深め、具体的な表現に落とし込んでいくという流れを基本として実施しました。対話を大切にする、と言えば聞こえは良いですが、上辺だけの対話形式は時として相手を議論の中で屈服させるゲームになったり、内実のない空論になってしまったりという危険をはらんでいます。この年の授業ではそのような瞬間は少なかったと思いますが、それはこの年の生徒さんが、授業の目的を言葉で伝えれば、その想いに一生懸命応えようと考え、話してくれる人たちだったということが大きいと私は考えています。1 年を通して、対話を基に考え他者に表現して欲しいという授業者としての願いを、目の前にいる生徒たちに受け入れられる形で提示できたという意味では、私の哲学観、洛星プロジェクトという一種特殊な授業空

間に対する理解、それに教員として習得してきたテクニカルな側面(生徒理解や授業計画の方法論など)がある程度つながり、形を為していたのではないかと思います。毎回、生徒に最適な形で授業できたわけではありませんし、最後の 2 ヶ月はもう一人のメンバーに頼りきりになってしまいました。反省は多いものの、グループでしっかりと対話した上で合意形成が取れた瞬間に、グループ全員で共有できた達成感や、授業後に自分も阪大の文学部に行きたいです、と言ってきてくれた生徒の表情は今でも覚えています。以来、教員として私が関わる子どもたちにも、あのような表情で自らの決意を語ってくれる子に育って欲しい、と願っています。

終わりに

ここまで、なるべく具体的な形で、私の洛星高校との関わりを一本の線に繋げようと試みてきました。6 年前のことですので少し記憶違いもあるかもしれませんが、それも含めて今の私が考える、もしくは考えてきたはずの洛星高校であると思います。ここまで懸命にまとめようと努めて書いてきましたが、なかなかの字数になってしまいました。最後に、今の教員生活に洛星での経験がどのようにつながっているか、ということを考えて、筆を置かせていただきます。

私が洛星の中で学んだことは、まず人と「共に考える」ための条件として何よりまずその場に「素直に」「いる」という姿勢が大切だということ、その姿勢を忘れてしまうと、私は権威をかさに着てしまう人間であり、それは教員として好ましくないということ、ゆえに私の場合は「素直に」「いる」という参加の仕方に自覚的にならなければならない、ということでした。もちろん、実際の生徒と接する中では「共に考える」ことでは解決しない場面もあります。教科指導の中で知識を教え込む必要もありますし、例えば人間関係に悩んでいる生徒などは、話を聞くなどして当人の気持ちを整理するだけで事態が好転することもあります。逆に、重い事情を抱えている生徒の中には、それに

ついて考えること自体が負担になったり、誰かと話すことが重荷になることもあります。「何か問題が起きた、じゃあ一緒に考えよう」、という一律のモデルではうまくいかない事の方が多いのです。しかし、だからこそ自らが取ることのできるアプローチとして、対話によって「共に考える」ことが大きな意味を持つこともありますし、その前提となる「素直に」「いる」という人との向き合い方は、私が関わる全ての生徒たちに身につけて欲しいと考えています。授業の中での生徒の発言に対し、心の底から感動することがあります。その発言が、私が考えた授業の主旨と異なるものであっても、その感動自体はみんなに共有し、その生徒に伝えることができます。あるいは、その発言のために新たな疑問が生まれたから、共に探究を始めないか、と問いかけることができます。教科指導や生活指導と洛星の授業は同じではありませんが、私が教員を続ける上で根幹となる理念の部分に、洛星で考えてきたことは大きく関わっていると感じています。私は臨床哲学という言葉の定義だったり、その概念自体への確信を固めきれないままに卒業してしまいましたが、この文章を読まれた方に洛星って面白そうだな、もしくは教員って面白そうだな、と思っていただけたなら、それもひとつの臨床哲学的な還元の形ではないか、とのんきなことを書いて、私の稿を閉じたいと思います。洛星高校にこれから関わるみなさん、頑張ってください。私も頑張ります。ありがとうございました。

（やまもときよひと）